

2013年2月3日 礼拝説教要約

聖書 ペトロの手紙一 2章 18～25節

「主の足跡に続くように」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

ペトロは、地上を生きるキリスト者を「旅人であり、仮住まいの身」と規定していましたが、そんな私たちに「神の僕として行動しなさい」と勧めていました。その生き方の具体例の第一として出てくるのが、「召し使いたち」に対する勧めです。どうして彼らに対する呼びかけが第一に出てくるのかというと、初代教会において、福音は「家庭奴隷」と言われる人たちの中に広く浸透していったからです。奴隷ですが、こうした人たちの中には教養のある人たちもいて、子どもの家庭教師とか、医者とか、一家の財産を管理してあずかるとか、重要な役割を担っていた人たちもあったといわれます。けれども、どこまでも家の主人に仕える労働者であり、たとえ主人よりも優秀ですぐれた技能をもっていたとしても、主人の意のままに働き仕えるほかなかったのです。

さて、まだ教会が生まれて間もなくの頃の、信仰を与えられた召し使いたちに向けて、ペトロは語りかけます、「心からのおそれ敬って主人に従いなさい。善良で寛大な主人にだけでなく、無慈悲な主人にもそうしなさい」(18節)。「無慈悲な主人」のところは、文語訳は「情けなき者」、口語訳は「気むずかしい主人」、新改訳は「横暴な主人」、岩波書店版は「意地の悪い主人」となっています。

自分が仕えている主人が、偏屈であったり、無神経であったり、横暴であったりすると、召し使いは一所懸命仕えても、喜ばれなかったり、叱られたり、不当な苦しみを受けることになります。不当な苦しみは、自分のせいではなく、合理的でも合法的でもなく自分にふりかかってくる苦しみですが、そうであっても「神がそうお望みだとわきまえて」苦痛を耐えることが「御心に適うこと」だとペトロは言うのです。「神がそうお望みだとわきまえて」のところは、「神を意識するゆえに」あるいは「神に対する良心のゆえに」という言い方で、神がおられ、すべてが神のご支配のもとにあり、神が正しく裁かれることを意識して、ということなのです。

私たちは、これらの御言葉を時代状況と社会環境が違うからと言って無視してはなりません。昔も今も、キリスト者となってこの世をどう生きるか。とくに信仰を知らず、理解しようとしないう人たちに囲まれた中でどうあるべきか。本気で真剣に生きる時、私たちの生活はやはり苦難と誘惑に満ちているのではないのでしょうか。緊張を強いられ、戦いが求められ、じっと耐え忍ぶことが求められる場面があるのではないのでしょうか。

ペトロが問題にするのは、それぞれのおかれた場所で、キリスト者としてその召しにふさわしくどう生きるかということです。そこでペトロは、キリストを模範として指し示します。善を行って苦しみを受け、これを耐え忍ぶことによって、主イエスの生き方と重ね合わされ、キリストご自身の道に連なるとは何と光栄で幸いなことかということです。「キリストもあなたがたのために苦しみを受け、その足跡に続くようにと、模範を

残されたからです」(21節)。

ペトロは、主イエスの折々の姿を、わけても主イエスが苦しみを負って歩まれる姿を、その時はまだ何も理解できていなかったにせよ、よく見てきました。網膜に焼きついていた主の苦しみをペトロは3つの点から描き出します。第一は、「この方は、罪を犯したことがなく、その口には偽りがなかった」(22節)ということです。第二に、「ののしられてもののしり返さず、苦しめられても人を脅さず」(23節)ということです。主イエスは、十字架に向かわれる間、ほとんど弁解されませんでした。周りの人々が主イエスを嘲り続けても、主は敵を呪うような言葉を吐かれることなく、むしろ、「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」と祈られました。そして第三に、主イエスはいつさいを正しい裁きをする方にお任せになりました(23節)。主がののしり返されなかったのは、正しい裁きをなされる神を信頼し、見上げておられたからです。

キリストの足跡に続くようにと召された私たちは、十字架の道をたどられた主イエスの姿を、目を凝らすようにして見つめなければなりません。主イエスはある時、弟子たちに言われました、「人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命をささげるために来たのである」(マルコ 10:45)。このように御自分の目的を語られた主イエスは、苦難の道を歩み、十字架上で御自分を完全に献げることにより、イザヤ書 53 章に預言されていた「苦難の僕」そのものとなられたのです。主イエスの十字架の死は、まったく不当なもの、不公正なもの、理にかなわないものでした。しかし、主イエスはこのような人間の横暴と不真実に報復することなく、すべてを父なる神からのものとして受けとめ、忍び、耐え、その道を全うされたのです。そのお受けになった傷によって、私たちはいやされたのです(24節)。

私たちは、このキリストに罪赦された者として、感謝の応答として、キリストの足跡に続くのです。模範という言葉は「下に書く」という意味の言葉で、元々習字のお手本を指す言葉だったと言われます。だから、キリストにならうとはキリストをなぞるのです。キリストをなぞるように生きていくのである。そこに私たちの光栄があり、幸いがあります。

信仰を言い表したばかりのペトロたちに、主イエスは言われました、「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」(マルコ 8:34)。このみ言葉を忘れて、信仰の喜びはないのです。